

## 続報：博物館へ追加寄贈された故熊沢正夫教授による研究資料と その裏面に残る記事について

Notes on a document of Professor Masao Kumazawa (1904–1982) donated  
to the Nagoya University Museum (II)

西田佐知子 (NISHIDA Sachiko)<sup>1)</sup>・原 幸喜 (HARA Koki)<sup>2)</sup>

- 1) 名古屋大学博物館  
The Nagoya University Museum (nishida@num.nagoya-u.ac.jp)
- 2) 愛知県名古屋市千種区  
Chikusa-ku, Nagoya City, Aichi Prefecture

### Abstract

Following the donation of March 2004, a larger set of similar documents made by the late Prof. Masao Kumazawa (Nagoya University) was donated to the Nagoya University Museum in April of the same year. The new documents consist of two parts: (1) 738 sheets of paper with sketches of vascular bundles in 15 plant species, and (2) 25 charts of data on the growth of maize plants. The sketches and data were provided on the back of old papers originally used for student examinations or various administration purposes. Based on the original scripts of 909 old papers including those donated earlier, we discuss their possible dates of reuse by Prof. Kumazawa. It seems probable that the sketches are related to his publications 1949~1958, and that the data of the maize plant growth are directly connected with one of 1949. Prof. Kumazawa reused old papers extensively for pursuing his research during World War II and thereafter – the difficult years of severe material shortage –. The papers also illuminate various aspects of the student life in those hard days.

### はじめに

原・西田 (2004) は、2004年3月名古屋大学博物館に寄贈された、故熊沢正夫先生によるシュロチクの茎断面のスケッチ画と、文献を読んだ際に作られたメモの遺品について報告した。その際、スケッチおよびメモの裏側(すなわち元の紙表)にある、熊沢先生の担当した試験の答案および事務関係の印刷物についても紹介し、資料の作られた時代に関する考察を行った。その後2004年4月に、同じ熊沢先生によるスケッチ画およびトウモロコシの生長に関するデータの資料が寄贈された。今回の寄贈は前回に比べ、枚数にして6倍に近い大量の資料である。しかも、裏紙として使われた用紙には、前回の寄贈資料にはなかった学校の答案用紙や、学生生活調査の用紙などがあり、戦争直後の学生生活などを把握する貴重な資料と思われる。また、トウモロコシ生長関連データの資料用紙には、戦時中の各種用紙も含まれていることが判明した。今回の報告では、関係する主題ごとに先回の資料もとり入れ、一括して紹介する。

なお、今回の報告を執筆するにあたっては、資料用紙の出所・年代調査とその整理を原が、「資料と結びつく熊沢先生の研究論文」を含む記述と全体の編集を西田が担当した。

## 寄贈の経緯

さきに原・西田(2004)で紹介した資料は、熊沢先生逝去の当時愛知学院大学教養部教授であった高木典雄先生(名古屋大学名誉教授)に伝えられたものを、同大学生物学教室の安富と原が名古屋大学博物館へ寄贈したものである。今回追加寄贈された資料は、高木先生から直接博物館へ寄贈されたものである。

## 資料の概要

### 1) 資料の点数

原・西田(2004)で紹介した資料は、ヤシ科シュロチクの維管束スケッチ画(B5判)134枚と文献研究メモ(B4判)12枚であった。今回、追加寄贈されたのは763枚からなる以下の資料である。

#### I. 維管束断面のスケッチ画(B5判 計738枚)

#### II. トウモロコシ生長関連データ(B3判1枚、B4判15枚、B5判やや幅広2枚、B5判7枚、計25枚)

これら今回の資料に先回の資料を合わせると、維管束断面図872枚・文献メモ12枚・トウモロコシ生長関連データ25枚の計909枚となる。

他に付属するものとして、各資料用紙のシリーズを納めていた封筒がある(下記参照)。

### 2) 資料の内容

#### I. 維管束断面のスケッチ画

前回寄贈されたシュロチクをも含めると、資料中で維管束のスケッチが行われた植物は次の16種である。[種名に続く数字はその種シリーズの用紙の枚数を示す。]

#### 単子葉植物綱

シュロ目	ヤシ科	シュロチク [134] (注：前回の寄贈による)
ホシクサ目	ツユクサ科	ヤブミョウガ [81]
ユリ目	イグサ科	コウガイゼキショウ [29]
	ユリ科	テッポウユリ [21]・キカノコユリ [56]・アマドコロ [84]・ハラン [106]
	ヒガンバナ科	ユリズイセン [25]
	ヤマノイモ科	ヤマノイモ [17]
	アヤメ科	シャガ [91]
	ショウガ科	シュクシャ [58]
	カンナ科	ダンドク [94]
ラン目	ラン科	セキコク [43]・カキラン [16]・ボウラン [6]

#### 双子葉植物綱

イラクサ目	イラクサ科	ミズ [11]
-------	-------	---------

これらのスケッチ画の用紙の数は、前回寄贈されたシュロチクを含めて計872枚である。しかし用紙B5版1枚の中に複数の断面図が描かれている場合もあるので、図面そのものの数はこれよりも多い。

維管束断面図の資料には、原則としてその用紙に熊沢先生の手で通し番号が付けられている。しかし多くの場合、一つのシリーズの開始部分又は終結部分に、番号なしで付け加えられた用紙がある。そこ

には、そのシリーズについての様々な書き込みがみられる。これは図であったり、断面図にある維管束をグループ分けした彩色のガイドラインであったり、その他のメモであったりする。また、ヤマノイモ17枚とミズ11枚には通し番号がない。これらには彩色もなく、書き込みも殆どないので、予備的な研究資料として残されたものと考えられる。

なお、維管束断面図については、どのシリーズにも日付は記録されていない。

## II. トウモロコシ生長関連データ

トウモロコシはイネ目イネ科の多年草で、多数の栽培品種を持つ。寄贈された資料中のトウモロコシの生長関連データには、数品種の生長データ（草丈や葉の高さなど）を記したもの、50を越える様々な品種（またその雑種）の栽培データ（胚乳の割合や果皮の厚さなど）を記したもの、栽培の結果をまとめたメモ、そして芽生えや若い花序のスケッチなどが含まれる。

これらのトウモロコシのデータ中には、「19年5月17日下種」「昭和20年5月8日下種」などの記述が見られる資料がある。

### 3) 資料を納めた封筒について

封筒は、その年代から大別して次の3種類に分けることが出来る。

- A. 資料用紙と同様に古色を帯びたもの [2袋]。
- B. 1981（昭和56）年5月から1982（昭和57）年1月までの間の郵便局消印があり、熊沢先生の自宅に宛てられたもの [5袋]。消印はないがほぼ同じ時期に用いられたと思われるもの [2袋]。
- C. 2004（平成16）年前半に名古屋大学博物館関係で用いられたもの [3袋]。

Aの2袋は古色の状態からして断面図が描かれた1950年代の「オリジナル」の封筒とみられる。

Bの7袋はその宛先から、1968（昭和43）年熊沢先生定年退官の後に用いられたものとみられる。消印で確認できる5通の日付は、1981（昭和56）年5月から1982（昭和57）年1月までである。またB1～B7にある植物種名の表記は、すべて緑色ボールペンで熊沢先生によって書かれている。筆勢も同じにそろって見える。これらのことは、資料が先生の手によってその時期に再整理され、痛んでいた「オリジナル」封筒が、新しく（再利用の封筒へと）取り替えられたことを示している。（熊沢先生は1982年11月5日に逝去された。）

Cの3袋は現在の名古屋大学博物館にかかわる封筒の再利用である。資料が博物館に届き西田によって大略の仕分けが行われた際のものである。

### 研究資料の用紙の出所とその年代

先回の寄贈品同様、今回の資料もその殆どに試験の答案用紙や事務書類などの裏が使われている。今回の寄贈資料の用紙を調べた結果、先の寄贈資料の用紙についても分かったこと（答案の試験問題など）もあるので、ここでは両方の寄贈品を一括した形で整理し報告する。

用紙については、試験の答案用紙とそれ以外に分けて、それぞれ解説する。文中「#数字」で表されたものは、熊沢先生が各植物のスケッチ画に付けた通し番号である。番号なしの用紙は、「#0」（開始部分の場合）あるいは「#xA」（終結部分の場合）として取り扱った。また、学生の氏名についてはプライバシーへの配慮から、「○○○夫」「○○○子」として具体名を入れずに記した。

トウモロコシの生長関連データの資料計25枚中には、再利用された用紙9枚（後出）のほかに、再利用ではない紙がB4判14枚、B5判やや幅広2枚、合計16枚見られた。このうちB4判のものは、裁

培データを記入するために表罫線などがガリ版刷りされたもので、12枚は裏が白紙、2枚は表自体は使わずに裏にデータのまとめを記入してある。B5判やや幅広の紙2枚は裏が白紙で、ノートか便せんのようなものを使用したものである。

### 1) 答案用紙

答案用紙はもともとB4版で、その半片B5版に切ったものがスケッチ画に使われた。先回の文献メモ12枚のみは、切らずにB4版のまま使われている。回答者の名前が特定できた答案は、全部で311名分あった。回答者の延べ数は、A) 旧制第八高等学校生130名、B) 新制名古屋大学生111名、C) 旧制名古屋市立女子医科大学予科学生70名であるが、前者A・B 2グループの学生間に3名の重複がある(下記参照)ので、実人員数は308名である。それぞれの答案記述時期と枚数は表1のとおりである。なお、同一の学生が同一学年度の間に、あるいは連続する2つの学年度にわたって、2枚又は3枚の記名答案を資料中に残している場合もある。例えば、Cグループの〇〇〇子は1年次と2年次にわたって2枚の記名答案を残しており、これらはそれぞれシャガとアマドコロのスケッチに使われている。このような重複も整理すると、308名の学生が計401枚の記名答案を残したことになる。ほぼ同数の無記名半片がこれに混じって資料用紙として使われている。

答案用紙には、問題は印刷されていない。多くの場合、学生は問題の番号(と記号)だけを前付けして回答を書いている。少数の学生だけが、板書あるいは口頭で示されたと思われる問題(又はその要旨)を、自分の答案に記した上で回答している。表2は、これら少数の記述と回答全体の内容とから推定した、試験問題のテーマの一覧である。多くの問題は、これらのテーマについて図解や解説を求めたものだったと思われる。

注目すべきことの一つは、今回の寄贈資料の答案回答者中に新制名大2回生(昭和25年度1年次生)49名が新しく含まれていて、それらがテッポウユリ・キカノコユリ・コウガイゼキショウ・ユリズイ

表1. 学生グループ別の熊沢先生担当生物学試験の答案記述時期と学生人数および  
[記名答案枚数]

学生グループ	昭和23(1948)年度	24(1949)	25(1950)
A 旧制第八高等学校			
39回生 21名 [22]	3年次 [22]		
40回生 82 [102]	2年次 [53]	3年次 [49]	
41回生 27* [28]	1年次 [28]		
小計 130名 [152]	[103]	[49]	
B 新制名古屋大学			
1回生 61名* [71]		1年次 [67]	2年次 [4]
2回生 50 [50]			1年次 [50]
小計 111名 [121]		[67]	[54]
C 旧制名古屋市立女子 医科大学予科			
3回生 24名 [28]	2年次 [28]		
4回生 46 [100]	1年次 [61]	2年次 [39]	
小計 70名 [128]	[89]	[39]	
合計 311名* [401]	[192]	[155]	[54]

\* 同一人でAとBの両グループに入っている学生が3名いるので、記名学生の実人員総数は308名である。

表2. 熊沢正夫先生研究資料用紙の裏面に見られる生物学試験問題群 (本文参照)

群	問題のテーマ	試験の		記名 枚数	研究資料の種類
		年度	回答者		
A	1. 中心柱の各種類図解 2. 根と茎の構造移行の図解	昭和 23	名女医大 予科 1年	31	シャガ
B	1. 気孔と水孔 2. 導管と篩管	23	同上 1年	30	ハラン
C	1. 杉材の顕微鏡的構造 2. 辺材と心材	23	同上 2年	14	ハラン
D	被子及び裸子植物で受精後、胚と胚乳の 出来る過程	23	同上 2年	14	シャガ
E	a) 硝化細菌 b) カロチン c) プロテアーゼ	24	同上 2年	39	アマドコロ
F	1. コンブとテングサの生活史 2. アオカビ・ケカビ・酵母菌・麦角菌 の分類	23	旧八高 理科 3年	8	シュロチク
G	1. Tropismus と Taxis 2. 学名の例示と説明	23	同上 3年	11	ヤブミョウガ (5枚) シュクシャ (6枚)
H	1. 血液凝固の機構 2. リンパ液	23	同上 3年	3	シュクシャ
I	1. a 紅色細菌 b ビタミン B1 2. 栄養素としての蛋白質	23	同上 2年	6	シュクシャ
J	Taxis・Tropismus の例と、その機構	23	同上 2年	34	ヤブミョウガ (15枚) セキコク (19枚)
K	1. 生物体の発光 2. 好気性と嫌気性の発酵	23	同上 2年	12	ヤブミョウガ (4枚) ハラン (8枚)
L	1. 重複受精の経過図解 2. 性別が遺伝形質なる例	23	同上 1年	15	ヤブミョウガ (13枚) [文献メモ (2枚)]
M	1. 従性遺伝 2. 細胞質遺伝	23	同上 1年	13	シュクシャ (4枚) [文献メモ (9枚)]
N	a) Jollos b) Winkler c) Burbank d) Johansen	23	同上 2年	1	[文献メモ (1枚)]
O	1. a) 二名法 b) アサクサノリ c) コウジカビ d) 麦角菌 2. 被子植物の受精	24	同上 3年	49	シュロチク (29枚) シュロチク拡大 (20枚)
P	1. 微生物の工業生産利用の 3 例： 何が何に 2. 殺菌法の種類と説明 3. a) ワクチン b) 化学療法	24	新名大 1年	30	ダンドク (29枚) シュロチク (1枚)
Q	1. 喰菌作用 2. 自動免疫・他動免疫 3. 光合成	24	同上 1年	16	ダンドク (15枚) シュロチク (1枚)
R	1. Ciliata 2. スピロヘータ・ウイルス・ リケッチャの各々による疾患名	24	同上 1年	21	キカノコユリ (10枚) シュクシャ (10枚) アマドコロ (1枚)
S	1. 木材 (杉) の組織を図解 2. 気孔 3. 細胞壁を構成する物質	25	同上 1年  2年	50  4	テッポウユリ (9枚) キカノコユリ (16枚) コウガイゼキショウ (16枚) ユリズイセン (9枚) (上 4 資料に各 1 枚)

センだけに集中していることである。このことから少なくとも、これら4種の断面図が描かれたのは、昭和25年度以降のことでそれより前のことではないと言えることができる。

答案回答者のうち、旧制第八高等学校生と新制名古屋大学生の記述時期の時代背景については、原・西田（2004）にすでにその一部を記した。その際に八高会（2003）と照合したところ、個人が特定できた学生数は旧制八高の69名と新制名大の2名であった。この2名のうち1名は、今回寄贈の資料中に旧八高一年次（41回生）としても回答している。ほかに今回2名の同様な旧八高/新名大間重複が見出されて重複は3名となった（表1）。

一方、旧制名古屋市立女子医科大学予科学生答案用紙は、今回の寄贈資料にのみ使われていたものである。そこで、この答案用紙が使われた経緯などについて検討したことを以下に述べる。

### 旧制名古屋市立女子医科大学予科学生答案用紙について

寄贈の当初、資料のシャガ・ハラン・アマドコロ断面図に集中して女子のみの記名が見られる答案があり、その由来は不明であった。その答案計128枚にはそれぞれ氏名に先行して「予科1（または2）年」と「番号」とが書いてある。番号は氏名の五十音順で最大は49である（「予1-49〇〇〇子」シャガ#43裏）。しかも組（クラス）の指定はないので、1学年が50名程度のクラス編成による女子の予科コースであると考えられた。

以下に述べるようにいくつかの点を検討した結果、次のことが明らかになった。すなわちこの答案用紙は、旧制名古屋市立女子医科大学（予科3年専門4年）において、熊沢正夫先生が非常勤講師としてその予科1・2年の生物学を、昭和23・24年度に担当された当時のものである。

- (1) ハラン#74裏の答案冒頭に「生物（熊沢講師）第二学期 予一年19〇〇〇子」とあること。
- (2) 合計128枚の答案中には、同一学生が複数の答案を書いている場合もある。この128枚で扱われた試験問題群は、表2のAからEに挙げたテーマのいずれかからなる。答案記述者の学年と答案枚数・学生数、ならびに問題群別の答案枚数をまとめたのが表3である。

表3. 旧制名古屋市立女子医科大学予科学生、答案回答者の学年と答案枚数・学生数、ならびに問題群別の答案枚数

学生グループ	答案記述者の学年と答案枚数	人数	問題群別の答案枚数 (A-Dは表2の問題群に対応)	
I	1年次のみで1枚	1名	小計 46名	B 1枚
	1年次のみで2枚	6名		A 6枚 B 6枚
	2年次のみで1枚	6名		E 6枚
	1年次で1枚2年次で1枚計2枚	18名		A 10枚 B 8枚 E 18枚
	1年次で2枚2年次で1枚計3枚	15名		A 15枚 B 15枚 E 15枚
II	2年次のみで1枚	20名	小計 24名	C 10枚 D 10枚
	2年次のみで2枚	4名		C 4枚 D 4枚
計		70名		小計 C 14 D 14 28枚 128枚

問題群 A・B・E の答案計 100 枚には 46 名がかかわっていて、その中の 15 名は A・B・E 三つの群のいずれにも回答している。学年の記載などから A は 1 年次第 1 学期、B は 1 年第 2 学期、E は 2 年次の試験で、この 100 枚はすべて同一の学生グループ (グループ I) による答案である。

C と D の答案計 28 枚には 24 名がかかわっていて、そのうち 4 名は C・D 両方に答えている。この 24 名 (グループ II) は、上記の 46 名 (グループ I) のどの学生とも重複しない。グループ I と II の学生の間で 2 年次の番号が同じペアは 18 組あるが、いずれも互いに別人である (例えば I の 1 番は「〇〇〇子」、II の 1 番は「〇〇〇代」である)。グループ II は、グループ I がまだ 1 年次生であった時期に 2 年次生であった可能性が高いと思われた。

- (3) グループ I・II について名古屋市立大学同窓会に照会した結果、グループ I の学生は昭和 30 年 3 月に、II の学生は 29 年 3 月に卒業したことを確認した。逆算するとグループ I は昭和 23 年 4 月、II は 22 年 4 月にそれぞれ予科 1 年に入学したことになる。
- (4) 名古屋市立大学 1970 年刊行の「名古屋市立大学 20 年の歩み 1949 - 1969」によると、戦時中の市立女子医学専門学校を基にして、戦後昭和 22 年 6 月 18 日に市立 (旧制) 女子医科大学 (予科 3 年専門 4 年) が設置認可となり、昭和 22 年 7 月 21 日に予科第 1 年次生が入学した。(同時に専門学校から予科 2・3 年次への編入もあった。) 昭和 23 年 4 月に学部 (旧制) が開設され、27 年 3 月には第 1 回生が卒業し、30 年 3 月に第 4 回生が旧制女子医大の最終学生として卒業した。これら計 4 回を数える卒業生の標準的な学年進行をまとめると表 4 のようになる。
- (5) 以上を総合すると、グループ I は昭和 23 年 4 月予科 1 年に入学して熊沢先生の生物学を受講し、24 年度の 2 年次にもそれが続いた。グループ II は 23 年度の 2 年次でそれを受講したものとみられる。

表 4. 旧制名古屋市立女子医科大学卒業生の標準的な学年進行

卒業回	年・月	昭和 22 年度	23	24	25	26
1	27・3	予 3 (医専から編入)	本 1	本 2	本 3	本 4
2	28・3	予 2 (医専から編入)	予 3	本 1	本 2	本 3
3	29・3	予 1 (新入)	予 2	予 3	本 1	本 2
4 (最終)	30・3		予 1	予 2	予 3	本 1

註：破線の学年が表 3 のグループ I、実線の学年がグループ II にあたる。

## 2) 答案用紙以外

試験答案以外の記事がある用紙計 58 枚の出所は、大きく分けて次の 5 分野にまとめることができる。

- A. 旧制第八高等学校から新制名古屋大学教養部への移行期にあたり、学科課程や入学試験に関連するもの (23 枚)。
- B. 同じ時期の学生生活にかかわる調査など (4 枚)。
- C. 同じく学内外の通知・規定・会議資料など (20 枚)。
- D. その他同時期のもの (2 枚)。
- E. 第 2 次世界大戦末期に作られたと思われる、製鋼・造船等の工場関係未使用書類の残片 (9 枚)。
- 上記 E を除き A ~ D の大部分は、昭和 23 (1948) 年度から 25 (1950) 年度に用意されたものである。例外は C3 - 8 の 5 枚で、これらは記述の内容から昭和 27 年度末のものと認められる。E については、正確な年度などはわかっていない (下記参照)。

以下、各分野ごとにその内容について略記する。「 」内は当該用紙の記載からの引用である。

#### A1. 学科課程に関するもの（6枚）

##### A1-1 「新制名古屋大学教養部学科課程（第八高等学校仮案）」カキラン#6

縦組み手書き清書謄写版黒色刷り、文科系・理科系の上下二段組。

鉛筆による「教育学」の表内書き込みあり。

##### A1-2 「(別表) 学科課程表 一、文科系」カキラン#4・#5

同上、文科系・理科系をそれぞれ別紙にわけたとみられる。

黒ペンによる書き込みが多数あり、印刷された「教育学」が抹消されている。#4半片冒頭に「附則 この規定は昭和二十四年七月二十日から施行する」とあり、その部分が抹消されている。このことから#4と#5の記事は、昭和24年7月に発足した名古屋大学教養部の規定別表の基となったものとみられる。

##### A1-3 「学科課程表」ヤマノイモ#10

縦組み手書き清書黒色刷り、文科系・理科系の上下2段組。

上段の「文科系」には、上記A1-2（カキラン#4）で加えられた修正をすべて取り込んで清書されていて、新しい書き込みはない。

##### A1-4 「第八高等学校」用箋を用いた学科別の単位数・職員配当数一覧表 ユリズイセン#23A・キカノコユリ#55A

2枚とも同一人（熊沢先生と思われる）による青インク手書き草稿。それぞれが別々のB5版半片とつながって、元はB4版の「第八高等学校」用箋であった。上記A1-1～A1-3の学科課程に対応するものとみられる。

#### A2. 入学試験に関するもの（17枚）

##### A2-1 昭和25年度の全国一斉進学適性検査[名古屋大学五十年史通史二p297]に関連する書類 シュロチク#1・#2・#3

これらの3枚については、原・西田（2004）に記した。

##### A2-2 「昭和二十五年入学合格者氏名 文学部志望（〈2字不詳〉三名）名古屋大学」ヤマノイモ#16

縦2段組手書き清書謄写版黒色刷り。各段に「受験番号・氏名・出身学校名」があり、同じくヤマノイモ#2～#8・#14・#15・#17の10枚にも、1枚につき最大30名の一覧表がある。

合計11枚に計287名の合格者名がみられるが、文学部の学生定員（昭和24～44年度）は120名であったので[前出部局史二p234]、これら11枚の名簿は文学部合格者だけに限定されるものではない。事実、少なくとも#5と#17には他学部進学者名が認められる。また#5と#17との筆跡は同じであるが、共に#16の筆跡とは明らかに異なる。

##### A2-3 旧制大学への最後の入学（昭和25年4月）を志望する旧八高生の志望調査一覧表 ミズ#1・ヤマノイモ#9

横組み手書き清書謄写版黒色刷り、第1志望から第5志望まで記入可能。

ミズ#1には左上欄外に番号4があって、欄内に八高39回生4名・40回生20名の記入がある。ヤマノイモ#9は、書式が同じ一覧表の右半片（無記入）である。

##### A2-4 「昭和26年度新制国立大学臨時編入試験受付名簿 第八高等学校」アマドコロ#0

横組み手書き清書謄写版青色刷り。

この一覧表半片（B5）には八高38回生1名、39回生4名、40回生（即ち昭和25年3月八高最終

卒業生) 5名の名が見える(受付番号1~10)。受付番号11は裁断線にかかり半分以下が不詳。いわゆる『白線浪人』対策として昭和26年度に限って行われた、旧制高等学校卒業生の新制大学2年次への編入に関わるものとみられる [前出部局史二 p212]。

## B. 学生生活にかかわる調査など (4枚)

### B1 学生生活調査集計と学生寮に関する記事3枚

同じホチキス跡をもつ。3枚とも縦組み手書き清書謄写版青色刷り。

#### 1-1 「D.学寮及び学生会館附属寮状況 一、学寮の部」 カキラン#15

「瑞穂分校学寮・豊川分校振風寮・法経学部桜鳴寮」それぞれの人員・経費等を示す一覧表。「食費+燃料費」月額1200~1260円。

#### 1-2 「二、学生会館附属寮の部」 カキラン#1

「一、場所 南外堀町六の一(旧六連隊内)」から「七、入所手続き 八、その他」までを記す。「食事代 1700~1800円程度」

#### 1-3 「学生通学区分状況(12月1日現在)」 カキラン#2

5学部(医・工・理・文・法経)、2分校、1専門部、合計2285名の学生の通学区分。60%が自宅通学。“専門部”は臨時医学専門部のことで、戦時中の必要から昭和14(1939)年に設置され昭和21年度以降学生募集停止、昭和25年3月31日廃校となった [前出部局史一 p951・952]。瑞穂・豊川両分校は昭和24年7月に設置された [同部局史二 p213]。これらのことから、この学生生活調査は昭和24年度(新制名古屋大学の発足年度)に行われたものとみられる。

### B2 母集団が807名(?)の学生生活調査部分 ユリズイセン#19

横組み手書き清書謄写版刷り B4の下半片 B5版。

「宿舎・通学時間・学費」等のほか「宿所別平均食費」として「学寮1492円、自炊1480円、外食1733円、下宿2295円」、また「遊学中の者の一ヶ月平均食費1765円50銭」とある。B1にある調査とは別の調査とみられる。

## C. 学内外通知・諸規定・会議資料など (20枚)

### C1 学生部関連の規定 (2枚)

縦組みタイプ清書謄写版青色刷り。書き込みなし。

#### 1-1 「二、文化掛... 三、体育掛...」 「第八條 厚生課...、 一、厚生係...」 ミズ#5

#### 1-2 「二、尚第十二條第五号の但し書きには...」 ミズ#2

学生への助言活動について記述。

### C2 「医学部附属病院事務部」関連の職務規定 (3枚)

縦組みタイプ清書謄写版黒色刷り。書き込みなし。3枚共に同じホチキス跡。

#### 2-1 「第十二條...」 ヤマノイモ#12・#13

この2枚は一部の字句が異なる別の版である。

#### 2-2 「第十五條...」 ヤマノイモ#11

### C3 通知・会議資料など (15枚)

#### 3-1 「昭和二十四年臨時種痘に於ける本学職員学生実施者調」 カキラン#10

縦組み手書き清書謄写版黒色刷り。

「部局別」欄に「本部」から5学部と「専門部」をへて「瑞穂分校」「附属病院」まで在名の9部局がみられる。「豊川分校」はなく、合計欄もないのでおそらくこれに続くB5の半片が欠けている

ものと思われる。

- 3-2 「一、昭和廿五年度春季愛知縣教育職員免許法認定講習...」で始まる「委員会議題」 シュクシャ # 0

縦組み手書き清書謄写版青色刷り。鉛筆による書き込みあり。

議題6題のうち「五、認定講習を愛知学芸大学に委譲の件」とあることは、講習の実施機関がそれまでは別の機関であったことをうかがわせる。

- 3-3 検査（進学適性検査か？）実施後の各検査場から集められた所見・批判・反省等のまとめ「p.9」の左半片 ミズ# 6

横組みタイプ打ち謄写版青色刷り。

- 3-4 「外国著作権」に関する注意書き「四」から「七」まで カキラン# 8

縦組みタイプ打ち謄写版黒色刷り。

「四、何が外国著作権あるものとして扱われねばならないかについては、具体的に総司令部により決定されます。」とあって、被占領中の通達であることがわかる。

- 3-5 「研究主題・分担・連絡」等について記入すべき用紙 カキラン# 9・# 12・# 14

横組み手書き清書謄写版黒色刷り。

提出先等については不明の未使用片。

- 3-6 仕事をする人についての5段階評価指標のうち「6. 責任感... 7. 独自性... 8. 計画性... 9. 作業の持続性...」 カキラン# 7

縦書き手書き（数字はすべてアラビア数字）清書謄写版黒色刷り。

適用部局など使用対象も不明。

- 3-7 社会科教育（計数関連を中心の）指導要綱の類 ミズ# 3・# 4

横組みタイプ打ち謄写版青色刷り。

「単利・複利」「計量的な消費生活」「一般数学の目的」など。

- 3-8 「名大体育科の要望事項（28年1月）」 ボウラン# 1～# 5

横組み手書き清書謄写版青色刷り。

昭和24年新制大学発足から満4年に近く、体育科充実のために体育科で準備された資料の一部とみられる。

#### D. その他ほぼ同時期のもの（2枚）

- D1 山岳会関係者回状（前半部分） カキラン# 11

縦組み手書き清書謄写版黒色刷り。

前年12月29日赤石岳聖岳縦走中に遭難した「部員深沢昭一君」の遺体収容にあたり、「先輩諸兄」に対して援助寄付の要請をするもの。後半部分が欠けているので、発信年月日と発信母体はこの書面だけでは読みとることができない。

なお、その後の調査（2004年10月）で次のことが明らかとなった。すなわち、当該遭難事故は昭和23（1948）年12月29日に起きたもので、遺体収容行動は翌24年5月と7月との2回にわたって行われ、最終的に遺体は7月19日に収容された〔東大山の会（1981刊）「山と友」東大山の会50周年記念誌p171-176参照〕。したがってカキラン# 11裏面の回状は、その文面に「既に雪どけの候となり」云々とあることから昭和24年の春に、東京大学山岳会の先輩である熊沢先生の手許に届いたものと思われる。

D2 身上書 カキラン#3

縦組み青インク手書き。

「理科一年五組(氏名)」とあり昭和23年度のものである。熊沢先生に指導教官をお願いした際に提出したものとみられる。(旧八高では学年・科目・組には拘らない指導教官制度がとられていた。)

E. 第2次世界大戦末期に作られたと思われる製鋼・造船等の工場関係未使用書類の残片(9枚)

トウモロコシ生長関連データ

E1 「勤怠表(男女)」1枚 B3版和紙活版印刷。

使用会社名不詳、「本期入営者」「本期應召者」等の記入欄あり。

印刷された罫線を利用して熊沢先生によるデータの記入がある。

E2 「大同製鋼株式会社 欠勤届・公休願・賜暇願・忌引届」3枚 B5版活版印刷。

E3 「尼崎船渠株式会社名古屋支店営業費内訳表」2枚 B5版活版印刷。

E4 「中部船舶用金物製造有限公司 噸型戦時標準貨物船艙装金物設備標準(船)」1枚 B4版活版印刷。

E5 「日本船舶用金物統制株式会社中部支社 船釘生産旬報」2枚 B5版手書き謄写版黒色刷り。

上記E1～E5に見られる5種類9枚の用紙が熊沢先生の手に入った経路は不明である。(戦時中の学徒勤労働員と何らかの関係があるのかもしれない。)

### 資料が作られた時期

維管束断面図に関しては、答案用紙・事務連絡用紙などが再利用されたのは、昭和23年以降の数年間にわたっていると思われる。しかしそれらが描図に用いられた際の時期的な前後関係あるいは並行関係については、今のところ明らかにする手段が見当たらない。つまりどの植物種の描図もその制作年度を特定するまでには至っていない。唯わずかに、(1) テッポウユリ・キカノコユリ・コウガイゼキショウ・ユリズイセンの4種の断面図は昭和25(1950)年度以降に描かれた(前出)ことと、(2) ボウラン#1～#5の5枚(答案以外の用紙C3-8)は他の年時推定可能な用紙よりも最も新しく、昭和28年1月に大学内の事務書類として作られているので、ボウラン断面図の成立がそれよりも後であるということが出来るだけである。

一方、トウモロコシの生長データには、前述したように「昭和19年5月17日下種」「昭和20年5月8日下種」などの記述がある。ただし、1枚のデータ用紙に様々な日付が同じ筆跡で残されているものもあることから、これらの資料は、種を蒔いて以降同時進行で記したデータではなく、栽培が終了した後データを集計・清書したものであろう。

### 資料と結びつく熊沢先生の研究論文

今回寄贈された資料のうち、維管束断面スケッチ画については、スケッチそのものが直接結びつくような熊沢先生の研究論文は見あたらない。「植物器官学」(熊沢1979)にも、資料として残された植物への言及はない。熊沢先生が残した大きな功績の一つとして、トウモロコシの維管束の研究が挙げられるが、残念なことにトウモロコシのスケッチ画は今回も見つからなかった。しかし、熊沢先生は昭和24から25年、東京植物学会(現在の日本植物学会の前身)で単子葉類の維管束や葉跡(茎から葉に入り込む維管束)について発表しており、その際、ハランヤツクサ科の維管束について言及している(熊沢1949a, 1950)。また、「単子葉維管束構成の二環説」を提唱し(熊沢1950, 1958)、「筆者は多数の散在維管束を有する単子葉類の種々の科の代表者について、多くの節間に亘り葉跡走向を追跡して見た」

(熊沢1958, p122) ことを自負している。従ってこれらの発表が、今回寄贈された資料のスケッチ画から得た知見を元に行っている可能性は高い。

また、トウモロコシの生長データは、「玉蜀黍の品種及びその雑種に於ける種粒の比較」という題名の論文(熊沢1949b)に係わっている可能性が高い。これは長野県農業試験場産の128品種及びそれらの交配第1代83品について、胚乳、胚、果皮の重量歩合、粒重、果皮の厚さを測定し、それらの相関を調べ、雑種強勢の影響を検討した戦時下の実用目的の研究である(田中1968)。資料に残されたデータの一部は、様々な品種種粒のまさしくこれらの形質を測定した値であり、また、資料中に「雑種強勢 1. 粒重ニハ強勢顕著……」などの記述があることから、資料とこの研究の密接な関わりが示唆される。なお、トウモロコシの雄花序の研究(熊沢1939)にも数品種の栽培データ(草丈や葉の数)に関する記載があるが、これは「1938年ニ……(中略)栽培シタ」とあり、今回の資料より前に栽培実験をしたデータ結果だと思われる。

熊沢(1939)は、トウモロコシの維管束については古くから研究があるものの、その多くは穂の中途の数節間を調査しているにすぎないので、自分は花序頂端から初めて根まで維管束を追跡すると述べている。今回の資料にはトウモロコシの維管束スケッチ画はないものの、他の植物の維管束でさえ丹念に追跡した証拠がそこに残されている。熊沢先生の研究方法はきわめて手数と時間と根気を必要とするものだったと田中(1968)は述懐しているが、今回寄贈された膨大な維管束スケッチ画やトウモロコシ生長関連データは、先生特有の研究方法を余すところなく表している貴重な資料と言えよう。

## 謝 辞

資料を寄贈して下さいました高木典雄教授に感謝いたします。また、山岳会関係者回状の調査にあたっては、社団法人日本山岳会図書室田村様のお世話になりました。お礼を申し上げます。

## 引用文献

八高会(2003)第八高等学校同窓会名簿平成15年版

原幸喜・西田佐知子(2004)博物館へ寄贈された故熊沢正夫教授による研究資料とその裏面に残る記事について、名古屋大学博物館報告, **20**, 121-127.

熊沢正夫(1939)トウモロコシの雄花序の維管束走向・玉蜀黍の維管束解剖, 第1報. 植物学雑誌, **53**, 495-505.

——(1949a)単子葉類葉跡条の典型的ヤシ型走向は果して実在するか?(講演要旨). 植物学雑誌, **62**, 68.

——(1949b)玉蜀黍の品種及びその雑種に於ける種粒の比較. 育種研究, **3**, 71-87.

——(1950)単子葉植物維管束構成に関する二環説の提唱(講演要旨). 植物学雑誌, **63**, 27-28.

——(1958)維管束構成並びに走向に関する考察・トウモロコシの維管束解剖, 第7報. 植物学雑誌, **71**, 117-124.

——(1979)植物器官学. 裳華房

名古屋大学(1989)名古屋大学五十年史部局史一

——(1989)同 部局史二

——(1995)同 通史二

名古屋市立大学(1970)名古屋市立大学20年の歩み 1949-1969.

田中潔(1968)熊沢正夫教授の業績. 名古屋大学教養部 紀要 自然科学・心理学・保健体育学, **12**, 1-10

東大山の会(1981)「山と友」東大山の会50周年記念誌

(2005年11月20日受付)